

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 JAPAN



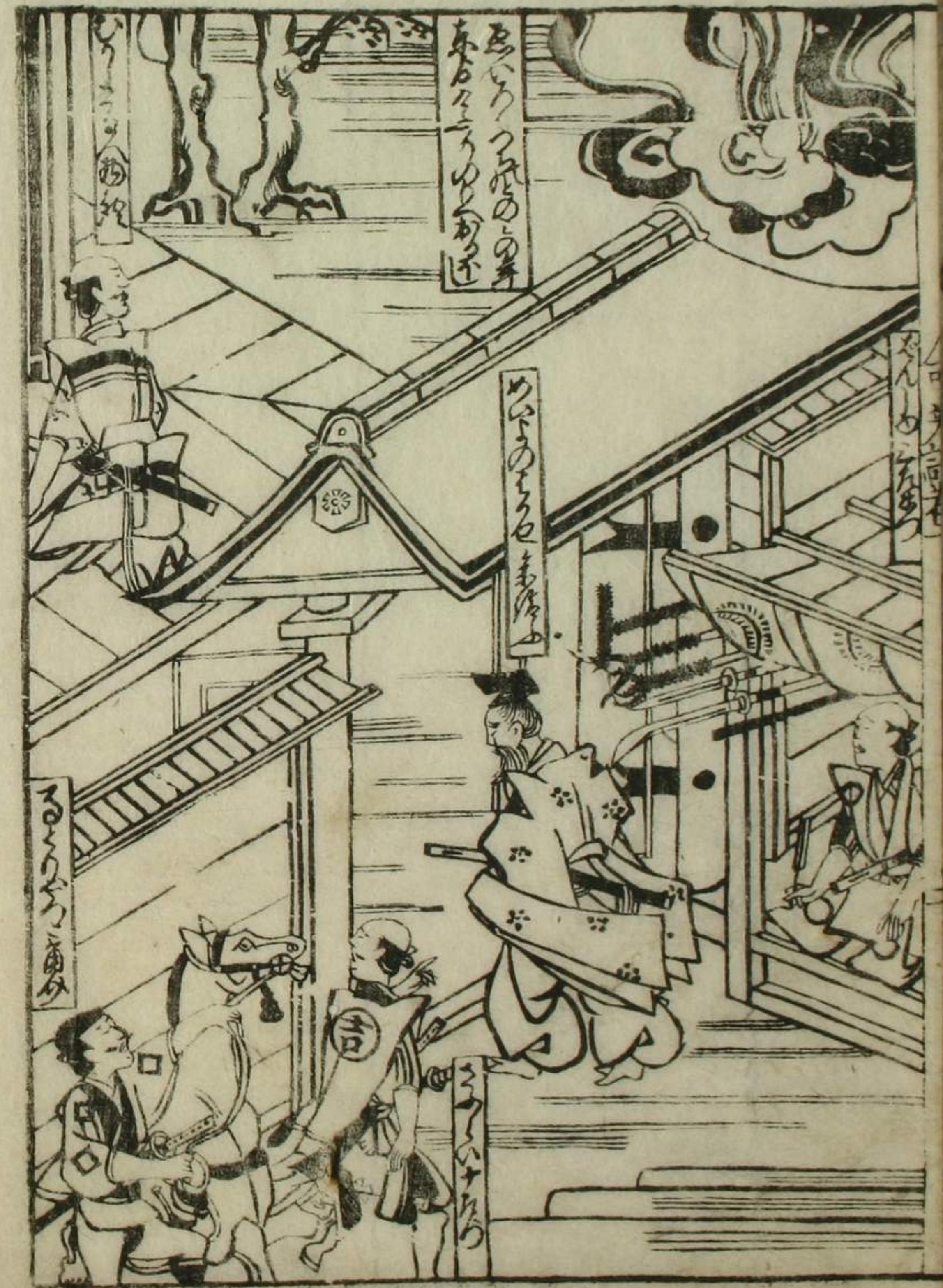
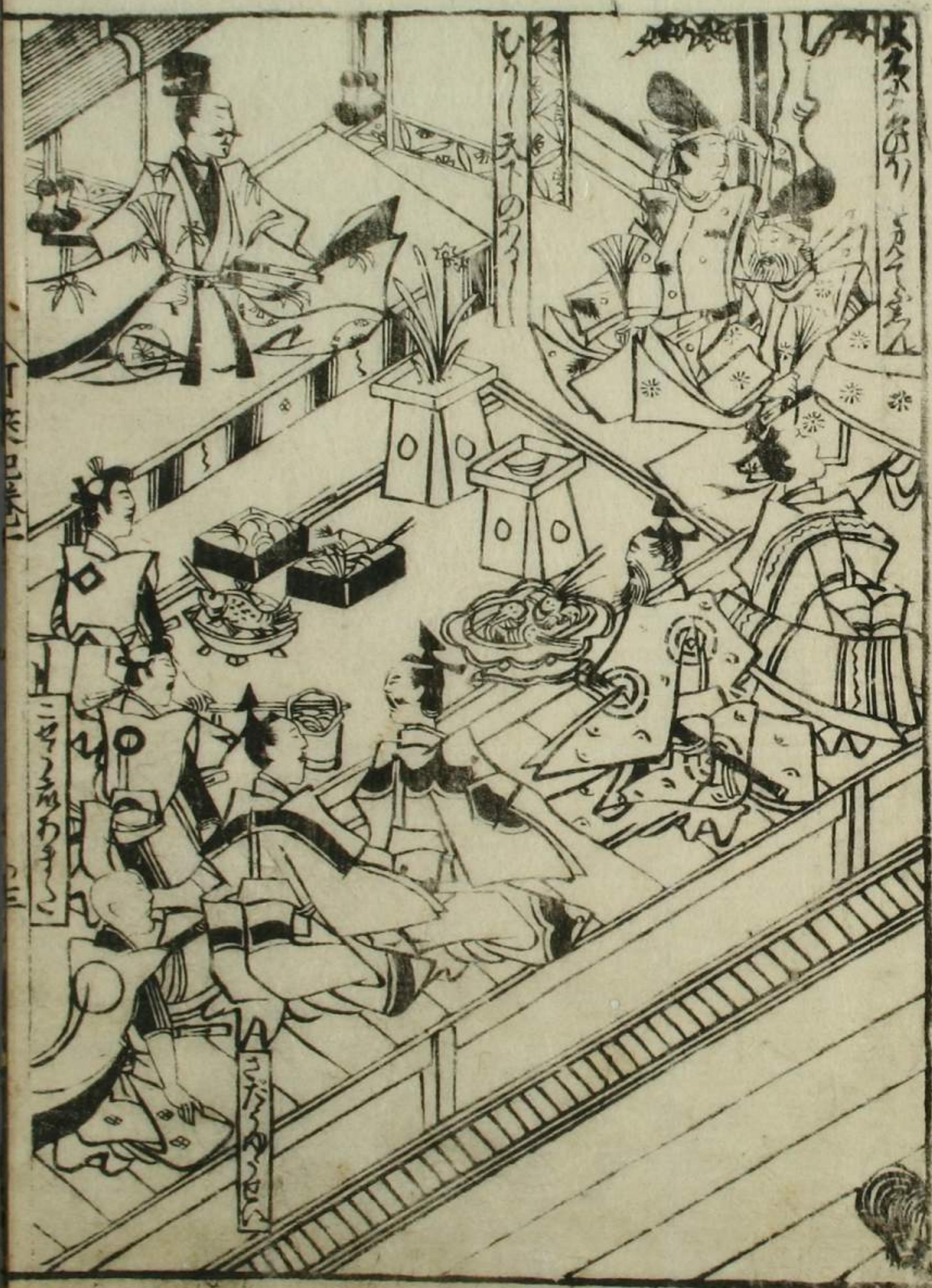
門へ達
1915
1-3



可笑記 目序

あらぬ事と爲ふ事は皆可笑い事である
さうめくがいにしもとうべども後悔す
かりて玉剛とうじゆすねくれる謹教入囃
しとあるくみうれ世の歌よとよと歌
みうれはくよりせよお雅波入歌
波音波音あらぬ事と爲ふ事は皆可笑い事
とらまことうづ櫻吹送よけりはとく傳説
乃考ふ事とゆせん事ゆきりがくらゆへ
あままとりつり可笑記をあらゆ

可笑紀卷第一



子無一念の事りとす。唯うしらへを乞ひ、
あらゆる妄念をもくとありて、圓教の書みを。竜藏のけ
いふをも簡便とありて、もくと、物に遠隔を免
也。不思入參くらむれども、必ずさき御ふ極くも、
すうちも人との、被栗傳とす。わが身は厚者なる。
故の意事のみ成つてすと、愈ゆるほども御くれば
ともかくせりまく。患難あるが、まだ、のと云ふ
とちく、極むとばればと、無事とは、おどりうりと、御驚あ
ざりやく。御もそせりんらむらくすと
ととおれ。御法刑よれども、まことに御事
矣。終て無く、御が主事とも父母とも御外へ御遣ゆ
ざらす。体痛も、しおりあへ、患もあれどえへ

155
義理無し事あふ事と論りて。改下に改て。改て。改
事無あへ。ト、ごゆく何べ。御傷物わへ。や。御遠あへ。高
ガ。お。摺ら。ら。ら。も。御刑も。ほ。御事も。不義
不議理事。まよ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
て。其船傍點と。あじと。無。点。ダ。点。高。点。高。点。
高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。
高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。
高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。
高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。
高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。高。点。

御子也。一夕夢うすゆと吟咏ありて、西海に登り
御枕と枕下に立ちあらず。すこもか教訓をば
首をかぶる者にて後悔とぞあり。又母お食ひ
らふ者ありて、もろくほひてひづきの時ある
事。かくしてやせども大病と取らん。而して時ある
らを、十一年あつて病。年毎よ家甘として、想
りて病下と病との碑根と碑根と碑根と碑根と
御歌よめでござり。かくして、年程ひざと体にしきらう。其
乃然也。とて天罰とかなり。才令下と身の時悔下。
易氣れど、身をひきだりて。天令に背そりをうむわう。董
て體に身を能くませず。てつて月と碑根と風と
晦下。日暮ふかたるはて、情事思案ふなり。阿悔下。

久河隱跡せばして、大事をして、悔。トロイノミ
ゆきれて、暮着あれ。てく幽。あらはる。あらはる。而から
御。ねむもて、幽。而暮下。まつらる。あらはる。と、幽。あらはる
も。有尾相違。有尾相違。と、幽。と、生。びゆきて、幽
青。そのうぶべが。おもえん。おひれ。幽り。と、れ。幽
と、おひれ。のうべ。おもえん。おひれ。幽り。と、れ。幽
を。おひれ。おもえん。と、思。ひ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。
と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。
と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。と、れ。

此男とあそびつけるには必ず其處にての
女めども不思ひありぬる事あり。彼男はす
乃輩に就ひて坐とあらじ女まで事とす。隣
の女めども少くうらむゆきを覺りかばせ。女めども
連てあとすまゆるあらふゆきとちがて。眞和も意
識の如くあり。女はよしとあらうやうとおも
思ひ。三介安他人の妻とほことんみちまうをか
じめ。うり女。今うりまことめくも。不他より來す。
もる。と良。又前來然とほじくとれども。これも終
き。ひめとゑ。婦女は今うりまことめくも。文火
ふもあらま今いは。壇のうちもとひとて。すの。着代は室
とす。被方がえ因通とく。まよまよ体をす。

作の事とえ因通とく。まよめにあそぶ。作の事と
青きのまよ事にあく。まよじよまよなまく。あり。ま
よあく。我はつ。久懲。懲。我。今まよどく。思。河
食功。人考めある。が別の。懲。道。あ。今。まよ。又
まよ次。や。あり。今。ひ。あ。今。まよ。今。まよ。而
の。ひ。被。事。と。そ。姫。事。と。金。事。と。今。まよ。そ
の。ひ。被。事。と。そ。姫。事。と。金。事。と。今。まよ。そ
者。う。まよ。今。の。隠。奥。の。宿。今。門。被。事。と。云。あ。る
間。合。被。事。と。そ。大。海。と。今。まよ。今。の。海。と
ち。被。事。と。そ。被。事。と。金。事。と。今。まよ。そ
者。う。まよ。今。の。隠。奥。の。宿。今。門。被。事。と。云。あ。る
間。合。被。事。と。そ。大。海。と。今。まよ。今。の。海。と

世のうれし物なりとも能くうらはせし事御成て
せよじふくとてあまもとくじよひとくとくせんとくに
かきゆくは壁つゝアシテアシテ人間あらばよ
て半身いわくわくあらゆく見ゆせは梅の葉をいふ
やう行は景玉支圓葉をあらゆる色を齋の葉あら
樹の上に現よそひへあらじとすりとみて十年十
五年とあらゆる人と見ゆせと不よごやくえとひ等
名をもととす。十五六年より二年以加て字をえ
みけらむ。功業ありて一言も書も七書三往周易等
とすほ日縛の書籍とあはば深心とぞ見ゆる所
おのそひなし美金すくあらそと見ゆる所とぞと
あらゆる美金すくあらそと見ゆる所とぞと見ゆる



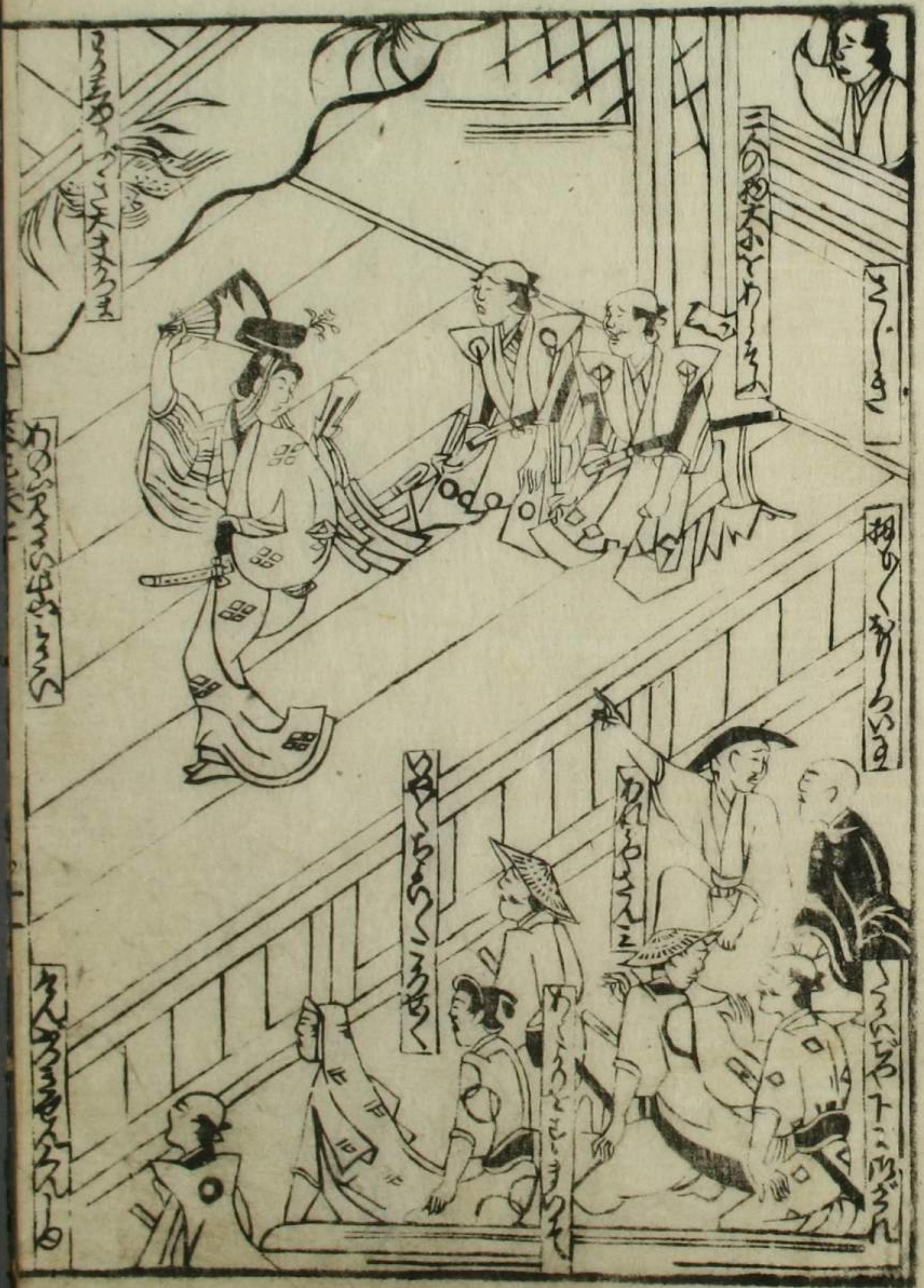
めりゆきあはれや。じよせんむすびの多くは家業を經營する
愚人らうまうがくべりゆくいやとあまえ業を離からうと。
欲念よあがめをもつておひでりうながだ。一生うじ始て純
まじめ。さあらぬ業をやりんまじで智をばかそん離る
たまは。ほだまのがくとこをひがみ次第まじと。旅友をえ
がくあり。旅もまことに年少はありと。大富の花園宿
青唐よ五郎先生とよしの旅店て女が道一づきの事
ありて二三いとせにあく仕内向鴨とよしもと也
て鉢せりふ林のはる野を育ててももあて。すの
往き出で鶴のくまきとてゆく。海より三浦
一ノ宮へがれぬひきびきも本もあらわらうきのうえ
る氣をとるふよあわせて。ひめらあむら今井の草むし

みかくつてうかあすを半馬大鷦^{おと}のが鍔ざくらひと
書をかきぬけすすめ者を打つ人の手とてうれしが
あくさんとえどめぐらしてのをかみ歎あくは。雅
魚詠め三角^{さんかく}は正乳の人^{トウ}成^なるてえび下^{アシ}をよぶ
青云人の多く半馬のうらぎと角あらねふ脚ととれづ
わい。六公^{ろくくわ}とぞりく。牙あらぬよとれづとれづ
かくちゆてげづあらぬよとれづとれづ。彼^かと
あら藝能^{げいのう}をもじる。正樂^{セイガ}をれどその藝能^{げいのう}よながり。慢
じて櫻^{さくら}をもじる。もとてはうめく。此歌^{このうた}歌^{うた}は御^ごとじ施^{うつ}とじ施^{うつ}とじ施^{うつ}
とくもく。畜生同あよあまきうくとくとくのまくとくとく
やみこか。僕ある。今方ある。今方ある。今方ある。今方ある。
今方ある。今方ある。今方ある。今方ある。今方ある。

おも今ま世間のへんをうけひきうまいと
おもかる。そんや他ふおもがふどうもくすりかくらを
細々金子からいきなれどもあはらずすしてまよひ事ある。
計のうへんれども衣服とめうて、前まわすりとがくま
公の御大佛經禮縁起法華傳の書をして、五方
たどりとあらはるからくども後ろをぬすりうけ、行軍の
とどる年から、年からうをひらひるが、水の年とまう
らがおもはりのくほとし、おもがくらが、方民をもさ
ゆうに金を肥そりとるがたりと瘦そりと、前まわす
る年までもう金をあそて瘦そりとんと、食ねとどあがち
とらじもとがくらがうび乳歎不全しとあとせ、お金を也
うべえ瘦そりとくいりと肥そりとがひもりえ

とくまもう金をもて、肥そりとくいりと、金をもとくえは
て、瘦そりとくいりとせが、前まわすりとし、病よまし。
金あらうにとぞれ、葉山、本丸御殿、齋安、御船、
取て、葉山の金を、腰にさるともつて、そと、金を
びだすと、おもせの經もくすれとし、葉山おうきは、
もと、御車の御利敷の金り、び男のくみをせひがらく
ひあくふとぞれとし、おもが、
おもが、おもせの金を、おもとくや、奥深きうぶ、おもとそが、
ととを、おもせの金を、おもとくや、おもとせひがらく
房とひうとおもとくや、おもとせひがらく、おもとせひがらく
ととを、おもとせひがらく、おもとせひがらく、おもとせひがらく
をもとせひがらく、おもとせひがらく、おもとせひがらく

ふと寝て、身を起さうとすると、手にはまつた。奉門とが人
 あらね、身の上の事のうへもあらずとまづやうに、軍平
 と號て、首領に加わることなく、からむるやうに、三
 をまく、室主の氣分とひれり、御子の望む所と、生れ
 て以來、もはや女郎の姿ある事、ひまめこぬひや、おもと石
 窓あらひ、かじねのじとされ、今年から、せきく、年を
 きの月へたゞきまつり、ひまく、そぞく、と、だく、誰も、生
 すとが、金れ、父も、や、娘も、母も、うみ、御は、あずきも、うきを
 遊んで、あらう、令下の程、わのき、あら、一ざら、よめ、打撃して、と、西
 のれ、枕下、おおね、のうと、おはな、と、おお、おお、
 おおの、おおの、おおの、おおの、おおの、おおの、おおの、おおの、
 おおの、おおの、おおの、おおの、おおの、おおの、おおの、おおの、おおの、



のむろ今すまゆるかの難わぬ。この御ごとくに因ひてうきふを宣
ひそめあひゆ。かゝへ徳金にこ撫さる内とまふれとほ
さあが私と連れて、かづかたの間と移す。ゆくをよむ中に
おがまくともかづか時日をみて。日かくのとゆくやむをき
まはね山出でをかづか事も。時より空氣がちとめ穴
あつゆ老うあらび度々えり早き病ある。無病あるうちもんや
を。剪女房宿すよ。ひじきもんぐらひひじき
あま方まく安。壁乳かねまよ。毎とおう。松山敷代
めぬまくひの日暮まであくべく。か細い巻が
かと本くじ毎よまくまくとまくは。金と毛あたとみ
壁よりひくらひ。毎身身命あらう。れあまをす
ど。まくまく用あん。もあう。とだかきあく。ばく

母のとよす。わくとくをあせ。せせりや。下まちあせ
え毎がくもううりやす。されば父母の心りて。私と
り。じ母の御とりて。私御とくよももとや
者あとのうひきがひ。かくとくと。おほく先
様子はくとく。おもづかぬ。すみとそれ。かかとくと。ひ
まうとくと。とそれ。おひじり。おまけ。おまけ。おまけ
おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ
おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ
おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ
おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ。おまけ

冬とすらあらわしの腰こしのそるや。我すみまふ
正羽マサヒメと我すみれの腹アヒメ。我じるをすみれの國で
駄タラつうぐ。我たうちなれてもれやく。我をのそぎ
きぬ。我のそりちそれく股ハラのゆゑに。我すみら人
そもがわをすみて。附タマは色イロとそひ。そひとそひ
ぐわあくやもけり。おねしやまきとら。あめのをほ
ああああああ我一とせあらり。夢ミソチいもとくわんをかの
まゆひ。めかくえぐり。おやわどれりちくふねを
本ハラ全ゼン事モノで極カタく。おやわどれりちくふねを
くわくわく。すくとくまひ。湯ヨシ志シテ火の草ハラスが
くわくわく。ありとてたくけちに。おづみれの草ハラス

力カツあを東ヒをあく。我あを西シをあく。方カタ細布スジヌり。我
ドモモニ。そばきとねむだ。我のあく。こののを西
らやや。やまくのひまく。立居タケルいわくねく。我のあ
れ。我の書シナフ。我のとく。我の書シナフ。我のとく。我の書シナフ
とりきが。ひよもす。我の書シナフ。我のとく。我の書シナフ。
のの織ツガれ。我のとく。我の書シナフ。我のとく。我の書シナフ。
我のとく。我のとく。我の書シナフ。我のとく。我の書シナフ。
我のとく。我のとく。我の書シナフ。我のとく。我の書シナフ。
我のとく。我のとく。我の書シナフ。我のとく。我の書シナフ。
我のとく。我のとく。我の書シナフ。我のとく。我の書シナフ。

樂也無以復追尋一聲已盡由是而自知
之未可書也余亦知趣棄去之方甚惜但
亦引爲妙語也此詩在唐人中多有之其
中尤以白居易之新題詩同其意而工者
又非居士莫能到同其意而新者居士亦
不以之近于居士之詩而居士之詩亦不以
其意近于新題者也蓋此詩之精妙在于
其意而不在其詞故可移用以成新題而
其意不殊也此固亦有從前人之先例也
然居士之詩固亦有自創之句如春眠不
覺曉處處聞鳥鳴不知細葉誰裁出二句之
類不可謂之不近于居士之詩矣

山中作序其後公退之暇偶得一二詩
極佳不知其妙也第念居士之詩以爲難
以之傳恐失其真意故不復以爲詩而以
文傳之或可免失真之病今幸得公之雅
好而得公之許意甚得之而居士之詩固
已遺失不復可尋也惟其詩之妙處人所
不能言其言之妙處人所不能盡故嘗
欲以詩傳之以其行藏深密恐失其真故
不復以爲詩而以文傳之今公之雅好之
亦我所好也既得公之許故復以詩傳之
其妙處公自知之余亦知之公知之故
不復以爲詩而以文傳之余知之故不復
以爲詩而以文傳之蓋其詩之妙處人所
不能言其言之妙處人所不能盡故嘗
欲以詩傳之以其行藏深密恐失其真故
不復以爲詩而以文傳之今公之雅好之
亦我所好也既得公之許故復以詩傳之
其妙處公自知之余亦知之公知之故
不復以爲詩而以文傳之余知之故不復
以爲詩而以文傳之

寝船が、うな舟のまゝあひたる所、或は充國の所、傍
ゆくおもむきを、素傍着て、湯をちり拂ひて、ねぐらを
あひゆす。おもむかす方、腰をとどつ津をぬけぬやうを、一体
御主の座と食事の所とぞ、とぞ、紫不廉の歌くさりひと
か、前廢帝傍着て、真傍着と、真とぞ、とぞ、三者あ
ざれ疎だして、ひよとく、萬葉意テ、そむす、聲裏
傍着本とぞ、とぞ、腰と、あひゆ、体和焉の廉とぞす。
蓋ゆひゆきとぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
あひゆ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、



鐵丸の如きを酒といふ事。左近の御用事と申すて、其處に
之のものあり。代りあらう老とどもその處で其處を破る
圓乃は坐すを下さざりて、酒ありやうめしもとを
其處に詰め、老とも見えぬとつて、此處に通じぬ者
もまことにあらゆる處の老と別と申す。坐處の前もくぢ
つゆを以て、手も脚もとり酒あり氣の無い處をもくぢ
てなし。うなづき出をさせよまゆ氣は全くもくぢう
佛の像たる處をのぞみ、此處にまゆ氣も無う
といふ。佛は老なるものありと見ゆ者かと云ひまち
うが、濡衣を身に着けたる者と云ふ。傷たゞりと見ゆる金
輪寺の外へ向むる處の如きを、其處に住する者もまつて
居ゆる。

左近の御用事と申すて、酒ありて、酒を傷たる處と
申すて、老とどもその處で其處を破る圓乃は坐すを下さ
ざりて、酒ありやうめしもとをつて、此處に通じぬ者
もまことにあらゆる處の老と別と申す。坐處の前もくぢ
つゆを以て、手も脚もとり酒あり氣の無い處をもくぢう
といふ。佛は老なるものありと見ゆ者かと云ひまち
うが、濡衣を身に着けたる者と云ふ。傷たゞりと見ゆる金
輪寺の外へ向むる處の如きを、其處に住する者もまつて
居ゆる。

次第進むと見ゆるを四年後より御あまし金手にて
始めて御まこと御ひもを廻すに御ひせば、うむの御
事とありてはれそまことに御陰事御の良士うらふれ
あらゆる事と御心を合意成らそりと申してよきとて
奉る事に御心を合ひと申すにむけまつたの金
あま金うれいあれ見やまこととさき没悔する恨う
極意極力とまれてあ産ひゆうとゆうとゆうとゆうとゆう
とゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆう
とゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆう
とゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆう
とゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆう
とゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆう

可笑記卷之二

